

Glocal Tenri



5

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.20 No.5 May 2019

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
御飯は食べてるか
／高見宇造..... 1
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道の様相 (29)
太平洋戦争と北米伝道⑦
ハワイでの戦後復興
／尾上貴行..... 2
- ・ 「おさしづ」語句の探求 (34)
「おさしづ」第4巻における「本席・家族」と「道」
／澤井治郎..... 3
- ・ 日本語教育と海外伝道 (10)
国内での日本語教育と海外での日本語教育⑤
／大内泰夫..... 4
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (8)
表と裏が反転しあう弁証法的世界
／金子 昭..... 5
- ・ 遺跡からのメッセージ (45)
文化遺産を今に活かす⑫
保護が急がれる峯塚古墳
／桑原久男..... 6
- ・ コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論 (26)
ベルギー領コンゴの独立③
／森 洋明..... 7
- ・ 現代宗教と女性 (24)
「優生保護法」改定阻止運動①
／金子珠理..... 8
- ・ ニューヨーク通信 (新連載)
天理文化協会の誕生
／福井陽一..... 9
- ・ 天理参考館から (17)
即位式にまつわる資料から
「文官礼服用模型」
／幡鎌真理..... 10
- ・ おやさと研究所ニュース 11
新連載執筆のねらいと執筆者紹介／新刊案内／ジェンダー研究会報告「金光教 LGBT 会の取り組み」(金子珠理)／「出前教学講座」申し込み受付／2019 年度公開教学講座の案内

巻頭言

御飯は食べてるか

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

4月1日、筆者の奉職する天理大学で2019年度入学式が挙行され、新入生811名が第一歩を踏み出した。永尾教昭学長は大学の「宗教性」「国際性」「貢献性」を説き、

社会の発展に寄与する人材になって欲しいと訓示をされた。大学によっては「令和元年度入学生」と呼ぶそうで、なおさら目出度いことである。親御さんにとってもその喜びはいかばかりか、私も心からお祝いを申し上げたい。とは言え、親元を離れて新生活を始める学生さんも多いから心配もされるだろう。そんな時はぜひ、親御さんご自身が大学に足を運んでいただきたい。

昔の話で恐縮だが、私が京都で学生生活を始めた昭和52年は、さだまさしの「^{かかし}案山子」が流行した年である。覚えておられるだろうか。

「元氣でいるか 街には慣れたか 友達出来たか 寂しくないか お金はあるか 今度いつ帰る ……手紙が無理なら電話でもいい 『金頼む』の一言でもいい お前の笑顔を待ちわびる おふくろに聴かせてやってくれ。」

下宿で一人、「案山子」を聞かされたとき、親の有り難さに涙したものである。両親は電話をかけてくると必ず、先ず「元氣でいるか」、そして「御飯は食べてるか」と聞いてくれた。その時は気付かなかったが、不思議なもので息子が東京で学生生活を始めたときも、先ず口をついて出る言葉は「御飯は食べてるか」であった。親も私も一緒だと思わず苦笑いをしたものである。親とはそういうものなのだろう。それは、我が子がひもじい思いをしてはいないかというまったく親ならではの心である。

ところで私は、『稿本天理教教祖伝』を拝読するなかで、どのように受け止めれば良いのか思案する場面や記述がいくつもある。例えば第九章「御苦勞」である。教祖は、明治7年12月から明治19年2月の満12年間にわたり約17、18回、警

察や監獄に御苦勞下されたが、第九章の270頁には次のようにある。これは「明治17年の御苦勞」と呼ばれ、教祖は87歳であられた。

「教祖は、拘引に来た巡査に向い、『私、何ぞ悪い事したのでありますか。』と、仰せられた。巡査は、お前は何も知らぬが、側について居る者が悪いから、お前も連れて行くのである。と言った。教祖は、『左様ですか。それでは御飯をたべて参ります。ひさやこのお方にも御飯をお上げ。』と、言い付けなされ、御飯を召し上り着物を着替へ、にこにこして巡査に伴われて出掛けられた。」とある。この後、教祖は奈良監獄署に12日間も御苦勞下されることになるが、教祖は自身を拘引に来た警官に対して、お側に居られた方に、「このお方にも御飯をお上げ」と仰せられている。たとえその時刻が昼時であったとはいえ、どうしてこのようなお言葉を発せられたのか、ということである。仮に私自らに置き換えてみても、とても言えることではない。それは恐らく誰でも同じことであろう。ではどうしてと考えると、教祖はこの警官に対してもまったく実の親が我が子に接するようなお心であったということである。「お前も忙しそうにしているがお腹は空いてないか、御飯は食べてるか」とご心配を下され、そのように仰せになったと考えると合点がいった。

この場面はともすれば深く考えることなく読み進んでしまうが、実は教祖のお心を我々も実感、経験させていただける大切な場面ではないかと思っている。『天理教教典』第一章「おやさま」(12頁)には、「月日のやしろたる教祖こそ、まことに一れつ人間の親である、との信頼と喜悅の心を、たかめるように導かれた。」とあるが、真に有り難いおひながたとして私は受け止めている。

皆さんはどのように思われるだろうか。

太平洋戦争と北米伝道 ⑦ ハワイでの戦後復興

おやさと研究所講師
尾上 貴行 Takayuki Onoue

ハワイの教信者たちの戦時生活

太平洋戦争中、ハワイでは1,446名の日本人が逮捕され、その内「危険な敵性外国人」として757名がアメリカ本土の司法省抑留所に送られている(山倉 2011年、100頁)。天理教関係者の逮捕は、日本海軍による真珠湾攻撃の直後から始まった。本田兼記ノースホノルル教会長は当日の午前中に月次祭をつとめていたが、その終了後間もなく検挙された。外出時に連行された川崎みゆきアロハ教会長は「一寸来てくれ、という事で、そのまま連れていかれ、着の身着のままで五日間、風呂もいれてもらえませんでした。」(天理教ハワイ伝道庁 2006年 a、48頁)と述懐している。反面、FBIが来たものの、逮捕されずにいた教会長や布教師などもいた。アメリカ本土と異なり強制収容は限定的であったため、官憲の厳しい監視下の中ではあったものの、信者宅訪問などを続ける教会長や布教師もいた。ラナイ教会では「住宅と教会は別になっており、田舎のことで誰も見張っているわけではないので、お供えもしておつとめもつとめた。お参りに来る人もあった。戦争中とはいえかなり安気なものであった」(天理教ハワイ伝道庁 2006年 b、50頁)。

しかし、天理教の教会長が抑留されハワイに残された家族、また戦後帰還した教会長や布教師たちは日系移民社会で厳しい目にさらされることになった。逮捕された教会長たちは、宗教家として人々から尊敬される立場から一転して犯罪人扱いとなるなど、精神的なダメージと屈辱は計り知れないものであった。また残された家族も、官憲のみならず、周囲の同胞の冷たい視線の中で生活を送ることを余儀なくされた。本田兼記会長が逮捕された後、ヘレン夫人は働いていたデパートを解雇され、逮捕されるような人に家は貸せないと家主に言われ教会を立ち退かなければならなかった。

戦後の復興

戦争が終結すると、抑留されていた教会長や布教師たちは順次ハワイに帰還し、残されていた家族とともに教会復興に着手した。しかし、戦時中にキリスト教などの他宗教に改宗した信者もあり、その道のりは容易なものではなかった。また天理教は、戦時中日本と強いつながりを持つ教団としてアメリカ政府当局に危険視されていた。1946年3月21日付のハワイ現地新聞『アドバタイザー』では神道復興反対が論じられ、「官憲の話として、まだ解散されていないホノルルの二十八社(多くが天理教)を解散させて復活できないようにする対策が執られつつある」(前田 1999年、39頁)との報道がなされるなど、敗戦国日本の宗教として、ハワイ社会ではその復興に対する強い反発があった。戦前に隆盛を誇った神社界は、「国家神道」との結びつきを懸念され、社会批判への対応や組織の再編などに多くの時間が費やされた。天理教でも、戦後にハワイで最初に教会が新設されたのは1950年のカリヒ教会であり、1954年にはハワイ諸島の天理教統括機関としてハワイ伝道庁が設立されたが、各教会が復興し、諸活動が活発化するには10年近くの歳月がかかっている。

戦後の日系移民社会ではアメリカ社会への同化が進み、一世から二世への世代交代が行われたとされるが、宗教社会学者の高橋典史は、ハワイの日系移民社会における日系宗教の変容を論じる中で、ハワイでは広範な日本文化の「リバイバル」が起

り、日系宗教も日本との関係を持続するという「トランスナショナルな側面」もみられたと述べている(高橋 2014年、93頁)。戦後、天理教においても、各教会は現地社会への「同化」を目指し、二世への世代交代をはかる一方で、日本から新たな布教師が派遣されたり、伝道庁に天理文化センターが設置されるなど、戦前同様に日本との繋がりが保持され、日本文化を通じての社会貢献を促進する側面もみられた。

「復元」と北米伝道

戦争がもたらした天理教教団への変化の一つとして、神道の影響下を脱し、教祖が本来説いた教えを伝え、実践するという「復元」が掲げられ、この動きは北米の天理教にも重要な意味をもつこととなった。日米開戦前から教団本部は日本政府によって厳しく干渉されるようになり、その活動も制限されていった。アメリカ本土、ハワイの日系移民社会でも、そうした教団本部の方針に応じた活動が展開され、アメリカ政府当局は教派神道の一派として日本国家との関係性を疑い、最終的には開戦と同時に敵性外国人として多くの布教師が逮捕・抑留されたのである。

歴史学者の島田法子は戦中戦後のハワイにおける神社の歴史を考察する中で、「宗教としての普遍性」について次のように述べている。

神道が仏教と異なるもつとも重要な点は、仏教が普遍的な世界宗教としての教理を掲げ、英語による布教を展開し、儀式や組織面ではハワイ主流文化に文化適応していったのに対して、神道は日本の民族宗教から脱皮できずにいたことである。普遍化の努力があったとはいえ、それはごく一部分に限られた消極的なものであった。(島田 2004年、189頁)

つまり日系宗教は、敵国としての民族宗教という枠を超え、信教の自由を保障しているアメリカ社会に受け入れられる方向性を見出す必要があったといえる。天理教では、満州事変以降、日本政府が国家主義的な思想統制を進める中で、天理教教義の根幹をなす公刊の原典が回収されたが、戦後あらためて公刊され、教祖の元々の教えにそった信仰の実践を目指すようになった。1951年に中山正善2代真柱はハワイ、アメリカ本土の各教会を巡教し、この精神を諄々^{じゆんじゆん}と説いて回っている。終戦は天理教が神道の影響下を脱する機会となり、北米地域においては日系移民社会またアメリカ社会全般に新たに受け入れられる方法を模索する出発点となったとも言えるだろう。

【引用文献】

- 前田孝和『ハワイの神社史』大明堂、1999年。
島田法子『戦争と移民の社会史：ハワイ日系アメリカ人の太平洋戦争』現代史料出版、2004年。
高橋典史『移民、宗教、故国—近現代ハワイにおける日系宗教の経験』ハーベスト社、2014年。
天理教ハワイ伝道庁『天理教ハワイ伝道庁五十年史—伝道庁史篇』天理教ハワイ伝道庁、2006年 a。
天理教ハワイ伝道庁『天理教ハワイ伝道庁五十年史—管内教会史篇』天理教ハワイ伝道庁、2006年 b。
山倉明弘『市民的自由—アメリカ日系人戦時強制収容のリーガル・ヒストリー』彩流社、2011年。

「おさしづ」第4巻における「本席・家族」と「道」

『おさしづ改修版』第4巻(明治29～32年)の「本席・家族」に関する「おさしづ」における「道」の用例を整理する。「本席・家族」として、ここでは長男政甚に関するもの(3件)を含めているが、ほとんどが飯降伊蔵本席の身上伺である。第4巻には「本席・家族」の「おさしづ」が21件ある。これは、年平均にするとわずかに4件である。第1巻の年平均22.5件、第2巻の同23件、第3巻の同23件と比べると、第4巻になって急に少なくなっていることが分かる。

前回の連載(2019年1月号)では、刻限の「おさしづ」が少なくなっていることを指摘し、「何ぼ刻限にて知らせど、刻限はいずれ〜やると追い延ばすばかりや。そこで俄かの事情、身上のさしづでなけりや論されん。」(さ30・1・13 村田かじ身上願)という「おさしづ」を引用した。本席身上伺は刻限と同様の意義のものとして説かれている。「刻限論したいなれど、どうも論す事出けんとは、前々論したる。……これまで重き者の身上にも知らしてある〜。」(さ32・6・19 本席三四日前頭痛にて痰つかえ御休みに付御願)とあるように、本席身上伺や刻限で伝えられるべき内容が、この時期になると個人の身上や事情に対して説かれるようになっていいると考えられる。

第4巻にある21件の「本席・家族」の「おさしづ」のうち、「道」が用いられるのは11件、3回以上「道」が用いられるのは5件である。以下で、その用例を確認する。

毎々論したる道(艱難苦労という道)

上記のとおり、「道」の用いられる件数は多くないが、そのなかで印象に残った用例は次のものである。

身上障る処、毎々論したる道という。いつ〜まで同じ事と思う。心間違うて〜、それ聞き分け。(さ30・6・22 本席四五日以前歯痛みに付願)

「毎々論したる道」と言われる。それを、またいつもと同じことだと思って、受け取り方を間違えてはいけぬ。その「道」をよく聞き分けるように論される。具体的には次の「おさしづ」がある。

艱難苦労という道は、毎夜々々話したる。道の上から見れば、今日の目と言え、何処からどんな事言おうが、皆世界に力がある。危ない怖わいという処、連れて通りたる。(さ31・7・14 昨朝本席御身上御願ひ申し上げば、夜深に尋ね出よとの仰せに付願)

ここでは、「艱難苦労という道は、毎夜々々話したる」と言われる。このように、いつも論し、話している「道」があると言われている。その内容はどのようなものか。「艱難苦労という道」である。この「おさしづ」には、次のお言葉が続いている。

元を聞き分けてくれる者が無い。そこで十年口説き話をする。話をすれば、心に感じて治めてくれるやろ。よう聞き分け。つとめ一条は出けず、かんろうだも、世界分からんから取り払われた。あれでもう仕舞やと言うた日もあった。世界どんな事あつても、付け掛けた道は、付けずに置かん。……若き神と言うた。十年の間若き神という。この者一つ順序の理、成らず〜の間、順序を論すは、この元台というは一寸には論せん。痛めてなりとかづめてなりと。名は秀司という。この艱難もよう聞き分けてくれにやなら

ん。若き神、名はこかん。……順序の道伝うてくれ。これはどういふ話であつたか。分かって知って居る者は知って居るだけ。知らん者に聞かしてやってくれ。(前掲)

この時期、「順序」という言葉が頻繁に用いられているが(『天理教事典 第三版』の項目「順序」参照)、ここでも「順序の道」と言われる。おつとめは止められ、かんろうだも取り払われ「あれでもう仕舞やと言うた日もあった」、また、「名は秀司という」「若き神、名はこかん」と名をあげて、その苦勞艱難の歩みがあつて、今があるという順序を聞き分けるように、また、知らぬ者には伝えるように説かれている。

この道

いつも論されているという「道」は、しばしば、「この道」とも表現される。

「この道というだん〜の道である程に。今日の一時勢力よいといえど、元はあちらへ逃げ、こちらへ逃げ、細い〜茨路から成り立ったものである。所々の治め方よう聞き分け。小さいものが小さいと言えん。大きいものが大きいと言えようまい。古き道より見分けてくれ。」(前掲、さ32・6・19 本席三四日前頭痛にて痰つかえ御休みに付御願)

この用例は、先にあげた艱難のなかを通り抜けてきて今があるという「道」の論しとよく似た意味のものである。ここでは、これまでの艱難のことを「細い〜茨路」や「古き道」、そうしたなかから徐々に成り立ってきたということ「だん〜の道」と言われ、そうして進めている歩み全体を「この道」という言葉で示唆されている。

次にあげる「おさしづ」も似たものであるが、「順序」とは、単に艱難な過去があつて今があるという経過を指すだけのものではないことが窺える。

「この道の理聞き分けて、早く順序治めてくれにやならん。この道にどういふ事ありたて、危ない道、どうしたらよからう、越すに越されん道ありたて、案じにやならんような道、神が連れて通りやこそ通れる。神の道に疑いは無い。」(さ31・12・30 本席御膳御あがりの節身上せまり御話)

ここで説かれるのは、「この道」を通るにあたって心に治めるべき物事の順序、序列である。神が連れて通るからこそ、「危ない道」も「越すに越されん道」も通り抜けることができると説かれる。そのほか、「この道」の通り方について、「この道は強いもん勝ちではいかんで。」(さ31・10・23 本席御身上願)、
「幾名それ〜、何名の中といえども、この道はたゞ一つの道でありて、道に二つの理は無い。」(さ32・3・5 本席一年程以前より左の耳聞え難くいと仰せられしに付願)などと論されている。

このように第4巻においては、「毎々論したる道」や「この道」と言われて、「道」という言葉が、教祖の時代から続く一連の歩みを指すものとして、すっかり定着した感がある。今日の道(第4巻当時)の状況を考えると、どこからどんなことを言ってきたても万事対応できる力をもってきている。それは、これまで危ない、こわいという道中を連れて通ってきているからである。この元をよく聞き分けてもらいたいと説かれている。

国内での日本語教育と海外での日本語教育 ⑤

ルーツはどこに

第二次世界大戦後、再スタートのような形で天理教の海外布教が始まったわけであるが、文化活動としての日本語教育の展開はいったい何がルーツになっているのだろうか。そのためには戦前に遡る必要があるようだ。

戦前の中国伝道の上で、日本語教育を行っていた佐藤軍紀が残した『黄土に祈る』(昭和16年)という本に興味深いことが書かれている。旧仮名遣いなので現代仮名遣いに直して引用することにする。

昭和八年頃である。成不成を神に委ね、真暗な闇の中を神の声を頼りに突進してきた華人救済の道も、その頃には信者七、八十名という予期しない素晴らしい結果を生み出していた。朝と夜には私のところに、きっと2人や3人の中国人が集まって世間話に花を咲かせていた。私は彼らの信仰をいかにして、強い大きなものにしてやろうかとそれのみに心を砕いていた。ここに思い浮かんだのが日語教授である。まず我が天理教は日本の宗教たるゆえ、彼等の曲げられた日本観を是正し、真の日本の姿を知らしめて、日本に親しみを感じしめねばならぬ。而して真の日本を理解し、日本を愛せしめるためには日本語を知らしめることだ。その心の基礎の上に天理教信仰を植え付けてこそ、最も堅固な信仰を把握せしめ得ると信じた。(292頁)

そして、佐藤軍紀は日本語教育を行うことを決め、ひらがなを教え、さらには天理教のおてふりの地歌であり、ひらがなで書かれている「みかぐらうた」の本を読めるまでに指導し、なおかつ歌えるようにしたようである。そして排日運動の中であって、後に日本語学校を開くことになった。彼は朝から伝道に出て、信者の家を回って教を説いて夕方から教壇に立っていた。「日語教授は私の伝道であった」とも、彼は語っている。初めてこの本を読んだ時に、筆者は大変驚いた。天理教がなぜ文化活動として海外で日本語教育を展開しているのか、ここに答えを見つけたような気もした。

長期にわたるつながりを築くため

日本語学校を開くという佐藤軍紀の新しい試みは、当時いろいろ批判もあった。「私の日語学校創立は、本教として始めての試みであっただけ、内地、現地を問わず賛否^{ともども}交々の批評を下された」(308頁)とある。それでも彼は自分の道が正しいと信じ、進んでいった。これは現在の文化活動を考えていく上でも話し合われていることと同じであるように思う。息の長い活動であるために結果が見えにくい部分があるようにも感じる。

「私は卒業の回を重ねるごとに六か月や一年ぐらいの日本語教授では、到底人材も出来なければ、日本語の完成を期することも不十分だ。どうしても生徒たちと長期に涉^{つな}りての連繫^{つな}をつけ、吾々が絶えざる指導と鞭撻^{むち}を惜しまないところに所期の目的を達することが出来るのだ。それにはどうしても彼等と宗教的師弟関係を結ぶことが自分の立場として最も簡便で近路だ。」(315頁)と述べているところから、佐藤軍紀は、自分の信念に間違いはないと思ったようだ。

この『黄土に祈る』は教内で海外布教に携わる者の間で広く読まれていたのではないだろうか。そして、半世紀以上にもなる海外布教のための文化活動として、日本語教育が続けられてきたことに影響を与えていたのかとも思われる。北京での伝道については、『海外布教伝道部報』第154号(1977)から第204号(1982)の長期にわたって「北京伝道回想」というタイトルで、夫人の佐藤玉栄の回想録が連載されている。

日本語ブーム

『黄土に祈る』によれば、当時の北京では日本語教育が盛んになった時があったようだ。満州事変後一時急激に燃え上がった日本語熱の波に乗り、北京には私立の日本語学校が大小合計200余カ所^{ぞくしゅうつ}簇出した。中には昼間、日本人経営の日本語学校に生徒として通学、夜間は自ら教鞭を取って堂々と生徒に日本語を教えているというようなインチキ学校さえあったという。日語学校の看板さえ掲げれば、立ちどころに50～60名の生徒は集められるという状況であった。わずか6、7カ月の日本語を習っただけで奇怪な日本語を教える中国人教師、商業的打算でもって“生煮え”の中国語で日本語を教える日本人教師などによる教育の結果は果たしてどのようなものになるか、慄然たるものがあっただけという。(319頁)

関正昭『日本語教育史研究序説』(スリーエーネットワーク、1997年)では北京における日語学校は約50校あったようだが、かなり怪しい中国人経営のものも多かったと思われる。(57頁)戦前の北京で日本語ブームがあったということも驚きだが、4、5年後には排日運動の嵐の中、淘汰されて激減した。そうした中、佐藤軍紀の学校の卒業生は最終的には400～500名に達していた。またその中から彼が頼みとする弟子たちもできていったと思われる。これには一度、師弟関係を結べば生涯、師であり、子が信頼した師匠につけば、その親も厳しく仕込んでほしいと頼むような中国人の気質も影響しているように思われる。

骨を埋める覚悟

佐藤軍紀の北京での活動をもとに話を進めてきたが、現在と比較してみても、やはり長期にわたってつながりを持ち、時間をかけて現地で活動することが大事なのかとも思える。現在でも海外の拠点に人を送り続けているが、期間は様々である。筆者の知る限りでは、骨を埋める覚悟で出発して現地に長くいる人もいれば、志半ばで戻った人もいる。人事や個人的な事情も絡んでくることであり、善し悪しを問えることではない。期間とはかく各拠点に人を送り続けていることで、現在まで続いて来ている面はあると思われる。

天理教青年会海外人材派遣が1991年から始まり、現在も第15次派遣予定の研修生が天理教語学院で研修中である。第1次からの派遣生の名簿を見ていると、2年の派遣期間を終えて帰国し、再度、直属教会からの派遣として現地へ向かい、布教所を構え、現地で布教をしている者もいる。あるいは、文化協会や出張所に勤めながら布教を続けている者もいる。数的に多いとは言えないが、志のあるものが再度、海を渡っている例がある。息の長い活動を続けて行くことが海外布教の上では大事なのかとも感じる。

実名著作と偽名著作はコインの両面

キルケゴールは多くの場合、実名著作と偽名著作を同時に刊行している。彼は、右手で信仰的著作を差し出し、左手で非信仰的著作を差し出したが、読者は偽名著作のほうばかりを受けとった、しかし偽名著作には自分の意見は一つも含まれていないと述べている。偽名著作の作者はあくまでその偽名著作者だというのが、キルケゴールの言い分なのである。実名著作にせよ、偽名著作にせよ、その背後には、生身の人間である「セーアン・キャケゴアー」が存在するが、彼は決して知られることがないだろう（前号参照）。

そこで、我々も作家キルケゴールのことだけを考えることにしたい。仮に偽名著作が彼の著作活動の裏面だとすれば、実名著作はその表面に当たる。しかし、表裏一体という言葉があるように、両者はキルケゴールの著作の持つコインの両面であり、それ自体が一種の弁証法的構造を有している。コインの表裏を分かち鍵はキリスト教の信仰である。偽名著作は、美的あるいは広く哲学的な内容を示しつつ、「間接伝達」の方法でキリスト教の信仰を志向している。これに対して、実名著作は「直接伝達」の形式で信仰を語り、一連の「建徳的講話 opbyggelige Taler」という名称で知られているものである（「建徳的講話」は倫理道徳的なニュアンスが濃いので、「信仰建て直し講話」と訳したほうが良い）。

いずれにしても、キリスト教というものが潜在的にも（偽名著作）、顕在的にも（実名著作）大きなポイントになることには違いない。ではここで問う。キリスト教が分かればキルケゴールが分かるのか。この問い方には、クリスチャンでなければキルケゴールは分からないものだという含意がある。それでは、キリスト教人口わずか1%の日本で、百年以上にわたりキルケゴールが読まれてきたのはなぜなのか。キルケゴール研究者や愛読者の少なからずはクリスチャンであるが、そうでない人々のほうがはるかに多いだろう。

日本におけるキルケゴール受容

ここで、日本におけるキルケゴール受容の歴史をごく簡単に振り返っておきたい。⁽¹⁾すでに1906年(明治39年)に、キルケゴールが続けざまに紹介ないし論評されている。内村鑑三はこの年の『聖書之研究』6月号の「大野心」の中で「思想家キルケガート」についての所感を述べている。また同年の『早稲田文学』7月号では、上田敏が「イブセン」論の中で、「哲学者キエルケゴオルド」の「あれかこれか」とイブセンの「一切か無か」との関連を論じ、同誌9月号では、金子筑水が「キヤーケゴールドの人生観」を書いている。内村鑑三はキルケゴールの無教会主義的姿勢に感銘を受けたようで、1914年(大正3年)には「刹那」(「瞬間」)の抄訳(石川鉄雄訳)を『聖書之研究』に連載した。宗教的関心を有する内村に対して、上田敏や金子筑水はそれぞれ文学的、哲学的なキルケゴール受容と言えるかもしれない。

1915年(大正4年)、和辻哲郎は大著『ゼエレン・キエルケゴオル』を刊行した。この著作は世界的に見ても最も早いキルケゴールの総合的専門研究である。キリスト教的関心からキルケゴールに再び注目が集まったのは、第1次大戦後からである。この時期、カール・バルトの危機神学(弁証法神学)が登場し、

日本でも神学の領域においてバルト経由でキルケゴールが着目された。1935年(昭和10年)には、三木清監修による『キエルケゴール選集』全3巻が改造社から刊行された。第2次大戦後は実存主義ブームに乗ってキルケゴールが読まれるようになり、今日に至るまで宗教的、哲学的、文学的、心理学的、時代批判的と、実に多様なアプローチがなされてきた。

受容の初期の段階において、キルケゴールの表記がキルケガート、キエルケゴオルド、キヤーケゴールド、キエルケゴオル、キエルケゴールと一定しなかったように、彼の著作は日本では当初からさまざまな観点から着目されてきたと言ってよいのかもしれない。作家キルケゴールは、我々に対して多様な顔を見せてきたのである。

反転する表裏の弁証法

キルケゴールとは何者なのか? 生前、彼は必ずしも理解されていたわけではなかった。とくに晩年の「教会闘争」の影響もあり、彼は「教会の嵐」と見なされていた。死後もしばらくは忘れられた存在でもあった。キルケゴールを新たに見出し、彼の思想に光を当てて広く世界に紹介したのは、ゲオーウ・ブランデス Georg Brandes (1842-1927) である。ブランデスは、ユダヤ系の文芸評論家として知られ、自由主義的で無神論的な思想家であると評された人物でもある。彼はニーチェとも交流があり、ニーチェにキルケゴールを読むように勧めたのもブランデスであった。

それゆえ、キリスト教が分かればキルケゴールが分かるというわけではない。そんな単純な問題ではないのだ。何よりもキリスト教が国家の公的宗教となり、これが国民の日常生活の隅々までに浸透したキリスト教世界そのものに対して、キルケゴールは新約聖書の説くキリスト教を導入しようとしたことを思い出せばよい(その最後の激烈な戦いが「教会闘争」である)。そういうことを考えてみれば、教会に毎週通い、牧師の説教を素直に受け取る篤実なクリスチャンであればあるほど、キルケゴールが逆に分からなくなるとは言えないだろうか。日本人の場合で言うと、自分はクリスチャン一家の何代目だと誇りに思っているような者ほど、キルケゴールから最も遠い所にいるとは言えないだろうか。

むしろ、信仰に絶望を感じている者のほうが、実はずっとキルケゴールの立場に近い。そもそも、信仰と絶望とはコインの裏表、ポジとネガの関係にある。キルケゴール自身にしても、そのことを自覚していなければ、実名著作と偽名著作を同時に書き続けることはできるはずがなかった。表裏一体とは文字通り、表と裏がきわめて接近していることを意味する。裏は容易に反転して表になるし、表もたちまち逆転して裏となる。そうした反転や逆転は論理ではなく、実存的な飛躍によって起こる。そして、この飛躍こそが、キルケゴールの著作活動における弁証法的二重構造の秘密なのである。

(1) 大谷愛人・柏原啓一「対談・キルケゴールと現代—日本のキルケゴール研究を回顧しつつ」、『理想』1979年8月号「夏季特大号・キルケゴール」、2～36頁、また小川圭治『キルケゴール』(講談社、1979年)参照。

学生たちが発掘をした高松塚古墳

筆者が担当する授業「日本考古学の歩み」は、考古学・民俗学専攻（今年度から考古学・民俗学研究コースに変更）の1年次生の必修科目で、毎年、古墳を扱う回に決まって見てもらうビデオがある。「高松塚古墳の歴史」と題したそのビデオは、飛鳥資料館が館内のビデオコーナーで上映するとともに、DVDの形で一般販売しているもので、高松塚古墳の発掘に参加した人々のエピソードを中心とした壁画発見までの経緯を再現したドキュメンタリーだ。ビデオは、1972年当時、関西大学の2年生として発掘調査に参加した森岡秀人氏が、個人的な日誌として大学ノートに書き綴った綿密な調査記録をもとに、網干善助教教授のもと、学生たちが調査に当たった様子を役者が演じている。盗掘孔の隙間から女子学生が石室の中をのぞき込み、壁画の存在を先生に伝えるシーン、森岡氏がいささか興奮気味に当日の状況を詳細に記したページを紹介するシーンが特に印象的だ。ビデオを見た受講たちは、あの高松塚古墳を学生たちが発掘したことにはまず驚き、さらに、自分たちと同年齢に近い学生が記した日誌の水準の高さにも圧倒される。

そこで筆者が受講生たちに話すのは、その頃、つまり1970～80年代にかけての天理大学の学生たちも、高松塚古墳を発掘した関西大学の学生たちと同じように、高い水準で古墳の調査を行っていたということだ。当時はまだ天理大学には歴史文化学科が設けられていなかったが、自主的なクラブ活動として、新しく結成された歴史研究会の学生たちが、顧問の西谷眞治先生、金関恕先生の指導のもと、大学周辺の布留遺跡をはじめ、各地の遺跡の発掘調査に参加したり、古墳の測量調査を自主的に行ったりと、活発に活動していたのだった。

大和の終末期古墳を代表する峯塚古墳

天理図書館の裏側、県道を渡って緩やかな谷あいの野道を東に少し奥に入った山裾にある峯塚古墳は、早くから著名な古墳として知られ、1917年、現地を訪れた考古学者の梅原末治氏が、墳丘や石室の詳細な観察を行い、略測図を示しながら、「壮麗なる横穴式石室を有する丸塚の代表的遺蹟」として、日本の代表的古墳の一つに位置づけ、当局の適当な保存措置が望まれると記している。時が流れ、1970～71年、活動を開始した歴史研究会の学生たちが、まず最初の測量調査の対象としたのが、この峯塚古墳だった。学生たちが作成した墳丘の測量図や石室の実測図は非常に精密なもので、その後、学界の基礎資料



写真1 峯塚古墳の説明板

として多くの研究者に利用されるとともに、2009年、古墳からやや離れた道沿いに天理市教育委員会が設置した説明板(写真1)でも、クレジットを添えて、その図

面が示されている。

て取れる。これは、飛鳥地域の終末期古墳と共通する特徴で、墳丘の築造に先立って、山裾を円形にえぐり、大規模な墓域の造成がなされたことが推察される。平坦面(墓域)の規模は、東西幅約60m程に及んでいる。墳丘は、3段築成の円墳で、直径35.5m(下段)という数字が報告されている。墳頂までの比高は約8.5m。墳丘は、裾近くでは約45度の急傾斜で腰高に盛り上がり、墳頂部は丸く平坦面が見られない。墳丘の斜面には、凝灰岩質砂岩(いわゆる天理砂岩)を用いた切石の葺き石が全面に貼り巡らされている。両袖式の横穴式石室が南側に開口し、石室の全長は11.11m。玄室は長さ4.46m。石材は表面を平滑に加工した花崗岩切石を用い、奥壁と両側壁は2段に積まれ、天井石は2枚になっている。切石の目地には漆喰が使用されている。羨道は長さ6.65mで、側壁の羨門部近くは切石が2段積みになっている。

やや専門的に言えば、丁寧に加工した切石を用いた峯塚古墳の石室は、7世紀前半から中頃に位置づけられる「岩屋山式石室」と呼ばれるものだ。「岩屋山式石室」を持つ終末期古墳は他にも類例があるが、その多くは、国指定の史跡クラスの重要かつ著名な古墳で、たとえば、昨秋の学外授業でも訪れた飛鳥の岩屋山古墳は、国の史跡に指定されて墳丘が整備され、また、安倍文殊院西古墳は国の特別史跡に指定されている。その中で、墳丘の全面に切石の葺き石が貼られている峯塚古墳は、希有な事例であり、他に比類のない重要な古墳であることを示している。

古墳とその周辺の景観の変遷を確認すると、明治年間には古墳の墳丘上には雑木が繁茂し、墳丘南側は水田だったことが絵図や文書に記録されている。大正年間の梅原氏による調査時も、戦後すぐの米軍撮影写真でも同様の土地利用状況になっている。歴史研究会が測量調査を行った1970年代初頭は、墳丘上は檜などの常緑樹で覆われ、墳丘の東西と南側は水田だった。1988年頃の写真では、墳丘上段を残して、竹などの樹木が伐採され、南側に開口した石室開口部を遠くから望むことができる。ところが1991年になると、墳丘上は北側の丘陵から竹が侵入し、それにより、墳丘上段に葺かれた切石が多数落下し、かつて水田だった墳丘の東西と南側の平坦地は畑に変わっていたという。現在は、墳丘上の竹林はますます繁茂し、地下茎が墳丘の葺き

石を痛め続けている(写真2)。竹の密林に覆われた墳丘は、離れた場所からは望むこともできず、意識をしな



写真2 竹の密林と化した墳丘の近況

ければ、その存在さえもわからない。峯塚古墳に関しては、筆者を含め、現地を訪れる人の多くが、墳丘のたゞまいと切石の壮大な横穴式石室に感動すると同時に、竹の密林と化している古墳の現状を残念に思い、何らかの保護的措置が急務であることを実感するのではないだろうか。

ベルギー領コンゴの独立 ③

おやさと研究所教授
森 洋明 Yomei Mori

コンゴ共和国では1970年代から90年代にかけて、隣国のコンゴ民主共和国の人たちを「ザイロワ (Zairois)」と呼んでいた。「ザイル人」を意味するフランス語だが、その発音にはなんとなく「見下した」ようなニュアンスが感じられた。アフリカの大国コンゴ民主共和国からは、多くの人がコンゴ共和国に来ており、首都ブラザヴィルだけでなく、国内の主要都市にも居住していた。通行許可証だけで往来できた時代には、滞在の有効期限が過ぎてもそのまま住み続ける不法移民も少なくなかった。

コンゴ民主共和国はベルギーから独立した当初は、フランス領だったコンゴと同じく「コンゴ共和国」という国名だった。その後「コンゴ民主共和国」と変更、1971年には「ザイル共和国 (République du Zaïre)」という名前になった。国名をザイルに変更したのは、軍の大佐だったジョゼフ＝デジレ・モブツ (Joseph-Désiré Mobutu) である。1965年、彼は軍事クーデターによって政権を掌握し、現地文化の復興の歩みを進めていった。国名の変更はその象徴的出来事である。ちなみにその1年前には、国の通貨も「ザイル」に変えている。この「ザイル」という表現は、現地語で「川」を意味する「Nzadi」、あるいは「すべての川を飲み込む川」を意味する「Nzadi o Nzere」を、最初にコンゴ王国と接触したポルトガル人が聞き違ってしまったものと言われている。ここから「ザイロワ」というフランス語も誕生した。



首都キンシャサにある
パトリス・ルムンバの像

独立時 (1960年) には、カサブ大統領とルムンバ首相が協同体制にあったが、その後政治の方向性を巡って対立するようになり、その混乱のなかでルムンバは暗殺された。しかし、鉱山資源の豊富な東南部のカタンガ州の独立宣言など、国内の混乱は深刻になる一方だった。そのなかで軍の力を背景に台頭したのが、ルムンバ首相の配下にいたモブツだった。政権を取った彼は、それまでの憲法を一方的に破棄するだけ

でなく、野党を非合法化した。また、革命人民運動 (Mouvement populaire de la Révolution) という党を創設し、一党独裁で強い権限を持つ中央集権体制を確立していった。さらにモブツは、国を独立に導いた英雄であるルムンバの国民的人気もうまく利用した。モブツ自身も首相の暗殺に関わっていたとされるが、国民的なヒーローを讃えることによって、彼の「後継者」としての地位を確立させ、国民からの支持を取り付けるようにした。

国名の変更と同時に、現地人に圧政を敷いたレオポルド3世の名前に因んだ「レオポルドヴィル (Léopoldville)」という首都の名前は「キンシャサ (Kinshasa)」に変更した。キコンゴ語で「塩の市」という意味のことばである。それはまた、独立以来「スタンレーヴィル (Stanleyville)」が「キサンガニ (Kisangani)」に、また「エリザベートヴィル (Élisabethville)」が「ルムンバシ (Lubumbashi)」というように、地方の有力都市が変更されてきた一種の「脱植民地化」の流れを汲むものでもあった。

植民地支配の名残を一掃するモブツの一連の改革は、自身の

名前も現地名を取り入れて「モブツ・セセ・セコ」と変更する徹底ぶりだった。さらに、それまで国のエリートが着用していたスーツにネクタイという西洋式の装いではなく、中国の人民服を思わせるような独自のデザインの服を着るようになった。さらには、アフリカにおける族長を象徴するかのような、杖やヒョウ柄の帽子を愛用するのだった。

その一方で、モブツは独裁体制をより強固なものにするため、アフリカにおける反共の「砦」という立場を最大限に利用した。実際に対岸のコンゴやアンゴラ、中央アフリカなど周辺の国々が共産化していくなかで、西側諸国はこの広大な国を自陣に留めておくためにさまざまな援助を行った。日本も例外ではなく、1971年にモブツは国賓として来日し、羽田空港で昭和天皇に出迎えられている。その後、通商産業省 (現経済産業省) の指導のもと、多くの民間会社の協力で鉱山開発会社が設立され、コンゴの南部において国家的な鉱山資源の開発プロジェクトが始められた。ピーク時には600人を超える日本人が施設の建設や開発のために駐在していたようだ。支援の一環で、1983年にはコンゴ川下流のマタディに円借款によって吊り橋が建設され、コンゴ川に架かる唯一の橋として今も重要な役割を果たしている。

独立国家の混乱だけでなく、東西冷戦という緊張した国際社会にあって、モブツはその後30年に及んで政権の座に就いてくのだった。90年代に入り、アフリカの民主化が叫ばれると、彼の独裁政治にも終止符が打たれ、政権を追われた彼は亡命先のモロッコで1997年9月に亡くなった。彼が蓄えた私的資産と国が抱える借款がほぼ同じ額だったとさえ言われている。

その後、ザイルはコンゴ民主共和国へ名前を戻した。複数政党制が導入され、民主選挙によって大統領が選ばれるようになった。しかし、選挙の不正や反政府分子との武力衝突、さらには大統領の暗殺など、今日においても混乱が続いており、世界で最も危険な地域であるとも言われている。ベルギー領コンゴでは国名が変更されるたびに多くの血が流されている、まさに「平和以外は何でもある国」(米田正子『世界最悪の紛争「コンゴ」』創成社、2010年) となっている。そして、そのような国を作らせたのが、何の準備もないまま唐突に独立させた旧宗主国であり、資源開発の権益を守るため、あるいは反共の砦を保持するため独裁政権を支え続けた西洋諸国であり、さらに90年代に民主化を急速に促した国際世論であると言えるだろう。

昨今、国名の変更とともに「ザイロワ」という表現がブラザヴィルの街で聞かれなくなってきた。国名に「コンゴ」がついている以上、民主共和国の人たちも「コンゴレ (Congolais)」になってしまったからだ。これでは対岸の「彼ら」と「区別」ができない。そこで最近では、国名の略語である「RDC」や「キンシャサ人」を意味する「キノワ (Kinois)」というフランス語がよく使われるようになってきている。



モブツ大統領
(1965～1997)

「優生保護法」改定阻止運動 ①

サレンバの衝撃から 20 年

男女平等や社会福祉の先進国として知られるスウェーデン。そのイメージとは裏腹に、ロシアへの危機感もあり、2018年1月には、2010年に廃止していた徴兵制が、8年ぶりに復活した。18歳の若者4,000人に、4カ月から11カ月の兵役を義務づけ、初めて女性も対象に含まれることとなった（徴兵の男女平等ではある）。また、スウェーデンにおいても、障害者への強制不妊手術が戦後の1976年まで行われていたことが、1997年に、マチエイ・サレンバ記者によって、スウェーデンの日刊紙に取り上げられ、日本の新聞でも「福祉国家の人権侵害」として大きく報じられた。

しかし日本も例外ではなく、強制不妊手術を定めた「優生保護法」は、優生条項が削除されて「母体保護法」へと改正される1996年まで、施行されていたのである。実にサレンバの衝撃的な報道の1年前までである。この旧「優生保護法」（1948～1996年）下での強制不妊手術は、約1万6,500件実施されていたことが明らかになっている。実際に優生手術が行われたのは、遺伝性疾患のほか、知的障害、精神障害のある人が多いとされる。手術された人の約7割は女性であり、また9歳や10歳で手術された少女や少年も含まれていたという。そして「母体保護法」への改正後20年以上経過した2018年、ようやく手術を受けさせられた当事者たちの声が表面化してきたのである。これら一連の動きのきっかけは、2018年1月に宮城県の佐藤由美さん（仮名、60代）が、15歳のときに知的障害を理由に優生手術を受けさせられたことに対し、国に謝罪と補償を求めて提訴したことであった。

奇しくも同じ頃、筆者は原因不明の国の指定難病に罹り入院していたが、難病申請の書類作成の際に、同意の上とはいえ、自身の「出生地」（〇〇県〇〇市まで）と「旧姓」（多くは女性）を書くときには、些かの「優生的なもの」を覚えざるをえなかった。転勤族ならば出生地に合理的根拠はないのだが、それが地域性および遺伝性の有無を視野に入れた研究調査を兼ねていることは明らかであった。にわかに、自分の身および親族にも「優生」の手が及び寄るのを感じ、他人事では済ませられなくなったのである。

1970年代の改定阻止運動

さて、旧「優生保護法」施行時代において、「からだ」の自己決定権を求める女性たちの運動と、一方の障害者差別反対運動との関係はいかなるものであったのか、そしてその周辺において「宗教」はどのように関わったのか。このことは、国家が「家族」や「女性の身体」に介入・干渉し、さらに出生前診断により「いのち」の選別が技術的に当時よりも容易となった、今日の状況を考える上で、参考になると思われる。

まずは、ウーマンリブ（以下リブ）を中心とした「からだ」をめぐる女性たちの運動と障害者の生存権を主張する障害者差別反対運動との関係を、主として荻野美穂著『女のからだ』に依拠しながら、1970年代と1980年代の2度にわたる、優生保護法改正（改悪）阻止運動を中心に振り返っておこう。

1948年に制定された優生保護法は、敗戦後の人口増加が問題化される中、明治以来の刑法墮胎罪を温存しながらも、条件付きで中絶を可能にする法律であった。条件は次々と緩和され、

翌1949年には「経済的理由」（経済条項）が加わり、1952年には事前審査が廃止され、指定医の判断のみで中絶が可能となった。その結果、中絶件数は増加し、出生率も急速に低下していった。しかし出生率の低下に伴う、将来の労働力不足を懸念する政財界は、1960年代末から、中絶を規制する方向へとベクトルを逆転させていくのである。

1968年の『厚生白書』において、当時の厚生省は経済条項の削除の検討を明らかにする。そしてついに1972年5月には、次の3つの改正点を含む、優生保護法改定案が国会に上程される。①「経済条項」の削除、②「胎児条項」の新設、③優生保護相談所の業務として、適切な年齢で初回出産がなされるように助言・指導を行なう、である。①の経済条項の削除は、事実上の中絶禁止を意味したため、リブの女性たちは改悪反対運動を立ち上げ、デモなどを展開した。②の胎児条項とは、「胎児に重度の精神・身体障害の可能性がある場合の中絶を認める」というものであり、障害者団体からの強い反発を招いていった。③は、現在の「卵子の老化」言説や結婚・早期出産を奨励する少子化対策を彷彿とさせる。

改定案は国会閉会により廃案となったが、翌1973年に無修正のまま再び上程される。

優生保護法は、中絶の合法化の他に、優生政策の意味合いを有していた。そもそも同法第1条に「優生上の見地から不良な子孫の出生を防止するとともに、母性の生命健康を保護することを目的とする」とある。これを根拠として、心身障害者やハンセン病患者などに不妊手術や中絶手術が強要されていたのである。これに加えて、「胎児条項」を新設することに反対運動を展開したのが、脳性マヒ者の団体「青い芝の会」であった。「障害者を胎児の段階から抹殺しようとする」と、ひいては『本来生まれてくるべきでなかった命』として、現に生きている障害者の存在そのものを否定することにほかならない」と、激しい批判の声があげられたのである。そしてその批判の矛先は、リブの女性たちにも向けられた。リブの「中絶の権利」や「産む産まないは女（わたし）が決める」というスローガンが、障害児の中絶をも含むのかどうか^{また}が^た糾^たされたのであった。障害や優生思想の問題を突き付けられたリブだったが、荻野が例証するように、リブはこの問題に決して無関心だったわけではなく、「女の性と身体の管理を通じて人口の量と質を国家が管理しようとする仕組みが存在することを、当初から鋭く見抜いていた」という。優生保護法改定案は、障害者運動からの抗議を受け、1974年5月、胎児条項を削除した形で衆議院にて可決され、参議院へ送られたが、6月の国会終了とともに審議未了で廃案となった。危ういところで「改悪」は阻止された。次回は、1980年代の阻止運動、そして宗教の関与について考察したい。

【参考文献】

- 荻野美穂『女のからだ』岩波新書、2014年。
 二文字理明・椎木章編著『福祉国家の優生思想』明石書店、2000年。
 柘植あづみ「強制不妊手術の問題が今なぜ注目されるのか」『東洋経済Online』2018年4月26日。<https://toyokeizai.net/articles/-/218189> (2019年4月3日閲覧)

天理文化協会の誕生

ニューヨーク天理文化協会副主任
福井 陽一 Yoichi Fukui

1980年から84年にかけて、天理大学英米学科に在籍し、大変お世話になった。卒業の頃、恩師に「君達は、今は何もできないだろうが、10年20年経ったらしっかり大学に恩返しさせてもらえよ。楽しみにしているで。」と激励されたことを鮮明に覚えている。恩返しどころか何もできないまま、もう30年以上が過ぎた。現在、ニューヨークで日本語教育に携わっているが、いまだに日本語を話すことも書くことも苦手で、執筆の依頼をいただいた時に躊躇したが、少しでもお役に立てたら幸いとの思いでニューヨークの様子を綴ってみることにした。

設立の頃

1991年ニューヨーク・マンハッタンに、天理文化協会が誕生した。それを遡る4年前の1987年、設立10周年を終えたニューヨークセンターでは、今後の新たな活動として、地域社会への貢献と接点創り、そして、陽気ぐらしの輪を広げていくおたすけ活動の一環として文化協会設立の案が浮上した。翌年、海外布教伝道部（現、海外部）より許可を得て、ニューヨークセンターを中心に現地教友によって準備が進められた。

オープニングレセプションでは、アジアソサエティーのディレクターで日本国憲法の作成にも携わったベアテ・ゴードンさんを来賓に迎え、鏡開きが盛大に行われた。当時の文化協会のパンフレットに、板倉知治会長は、「ニューヨーク天理文化協会は、世界中の人種が集う大都会の一隅に、神人和楽のための空間広場を設け、芸術を愛する人々を中心に、創造と調和、啓蒙の場を提供します。多くの方々の御理解と協力をお待ちしています。」と書かれた。

所在地

文化協会はソーホー地区ブロードウェイ 575番地に誕生した。レントの高騰もあり、賃貸契約が切れる前年、2000年にグリニッジビレッジ地区の5番街と6番街に挟まれた西13ストリート43番地に移転した。この時、教会本部の親心で、建物の1階フロアを購入することができた。この地区には、ニューヨーク大学をはじめ、パーソンズ美術大学やマネス音楽院を傘下に置くニュースクール大学、プラット・インスティテュートなどの大学が多い文教地区とも言える。また、ワシントンスクエア公園やジャズで有名なブルーノート、ビレッジパンガードなどがある。古くからニューヨークの芸術の中心地として発展してきた場所でもあり、作家O・ヘンリーやオルコットの住居も残っている。ちなみに文化協会のある13ストリートは、たくさんのレストランが並びレストラン通りとも呼ばれている。隣にはニューヨーク大学の寮、その隣はニュースクール大学、向かいには映画館、劇場、ホテルが並んでいる1ブロック北の14ストリート沿いにはユニオンスクエア公園やグーグルのオフィスがある。若者が多く住む活気溢れる街で、現在はニューヨークで一番ホットな地区と言われている。文化協会の活動もこのような若い人々を対象にした教育分野での活動がますます求められているように感じる。

建物

文化協会のある建物は1906年に建てられた9階建ての美

しいビルで、昔ガラス工場として使われていた。そのため、ガラスハウスビルディングとも言われている。その後、デパートや撮影スタジオとして使用され、現在文化協会が1階に入っている。天井が高く、3分の1のスペースにメザニン（中二階）を作り、総面積が合わせて約6,400平方フィート（約600平方メートル）になる。



ニューヨーク天理文化協会

内装設計は、当時コロンビア大学で教鞭を取っていたスコット・マーブル（Scott Marble）氏が担当、ガラスを効果的に使った素晴らしい空間が出来上がっている。この内装はその年に作られた全米の内装作品の中で最も優れている建築に贈られるインテリア・デザイン賞を受賞している。

活動内容

活動内容は日本語学校を中心にコンサート、絵画の展示会などの文化活動が行われている。2002年からは、子供対象の日本語クラスもスタートし、現在では子供210名、大人170名の合わせて380名が在学している。コンサートも年間100回以上行われ、展示会も常時開催されている。

2010年からは天理大学ニューヨークキャンパスとして、インターンシップ研修、日本語教育実習、英語短期集中講座、交換留学生や認定留学生のお世話取りを行っている。

経費

海外部に設立の許可を得た時は、最初の3年間だけは、教会本部からの援助金を元に運営し、その後は独立採算で進めていく予定だった。しかし、なかなか自立できず、開設して25年目の2016年によく援助金なしで運営できる状態になった。日本語学校の授業料がかなりの部分を占めているが、そのほか、コンサートやギャラリーなどの収入、寄付金などで運営している。

文化協会に携わるスタッフは、「底なしの親切」と「いつも笑顔」をモットーにつとめている。広い世界を縮図にしたようなニューヨークの地で、様々な活動を通して、多くの人々に陽気ぐらしの教えに接する機会を提供するには、スタッフ自らが醸し出す陽気な姿が何よりも大切になる。それは、同時にスタッフ自身の心の成人の場でもあると思われる。これから、ますます多くの人々に文化協会に携わってもらい、力を合わせて天理の光を輝かせていきたいと思っている。

今回は、文化協会の大まかな紹介となったが、次回からは、ニューヨークの様子なども含めながら、文化協会の動きを詳しく伝えていきたいと思う。

即位式にまつわる資料から「文官礼服着用模型」

天理参考館学芸員
幡鎌 真理 Mari Hatakama

新元号が「令和」に決まった。今年には天皇に関する事柄に注目が集まっている。ここでも、天皇の即位に関わる資料を紹介する。平成31年4月30日今上天皇譲位、令和元年5月1日新天皇即位と時代が移り、10月22日には即位礼正殿の儀が執り行われる。これは皇位継承の儀式の一つにあたる。まず5月1日は皇位の証である三種の神器を受け継ぐ儀式、続いて即位礼正殿の儀、最後に11月14日と15日の大嘗祭へと進む。即位礼正殿の儀は、そのなかでも内外に即位を宣明する重要なものである。

今回の資料はその即位式での服装を示している(図1)。一見して中国の人形かと思うが、れっきとした日本の即位儀礼に文官が着用する礼服を示す。中央に綬を垂れ、右脇に玉佩を吊り、左脇に短綬を付けて牙の笏を持って威儀を正す姿をうつす。奈良時代の701年に制定された「大宝律令」の衣服令に記載される公家の最上礼装が「礼服」



図1 井上式地歴標本「文官礼服着用模型」
明治末 高さ24.0cm

で、現在でも冠婚葬祭の服装としてその名称をとどめている。礼服は五位以上の官吏にのみ着用が許され、さらに位階によって

厳密に規定される。礼服着用時のみかぶる礼冠は、黒の三山冠の周囲に金属製の押蔓をめぐらし、後頭部に櫛形を立てて各種の玉を飾るなどした。当初は新年朝賀や大祓などの祭祀にも用いられたが、平安時代中期になると、天皇が踐祚の後、皇位継承を天下万民に公示する即位式にのみ着用する特別な服装となった。文官は即位の宣命を読む務めがあり、即位式の責任者である内弁の左大臣を補佐する。今年、京都国立博物館で初公開された江戸時代の六曲一双の「霊元天皇即位・後西天皇譲位図屏風」にも彼らが描かれていて、同様の服装で新天皇に拝礼する姿は興味深い。しかし、古代以来の



図2 三彩文官 唐代
高さ86.2cm

即位式での礼服着用は江戸時代までで、明治天皇の即位礼以降和風の装束が採用されて、これを「御装束」と称するようになった。明治になって唐風儀式撤廃、古式復興が目指された結果である。なるほど唐三彩の文官の装束に重なる(図2)。

古来の即位式を伝えるこの屏風は京狩野第三代狩野永納が描いたと考えられている。霊元天皇は、江戸幕府と朝廷の亀裂を生んだ「紫衣事件」で譲位した後水尾天皇の第十九皇子で、兄の後西天皇から位を譲られた。この時わずか10歳だった新帝は24年間在位の後院政を敷く。当時として78歳の長寿を全うした院は、晩年落飾し法皇となった。これ以降天皇が法皇になることはなく、最後の法皇である。

この標本模型は、奈良時代から江戸時代までの様々な装束を着用した「井上式地歴標本」と呼ばれる素焼彩色人形である。わが国人類学の祖と言える坪井正五郎が、明治末に博多人形師井上清助に作らせた。坪井はまだ知名度の低かった人類学を、人形を活用して大衆に浸透させようと考えていた。製作した井上はそれまで素朴な郷土人形だった素焼人形を、今日の著名な「博多人形」に引き上げた人物で、内国勸業博覧会やパリ万国博覧会に意欲的に作品を出品しては受賞の榮譽を得ている。坪井を通して、『古事類苑』の編纂に参画した関根正直や、国定教科書制度に主要な役割を果たした芳賀矢一も監修を引き受け、学校向け教材として大々的に売り出された。新聞や学術雑誌にも広告宣伝を行い、その記事が掲載されている。東京帝国大学の当代一流の学者たちが手がけ、万国博覧会で受賞歴のある人形師が製作した最高水準の教材である。当時は急激な欧化主義の反動から日本古来の伝統文化保存に目が向けられた時期でもあった。当館ではこの「文官礼服着用模型」のほか、全34体(図3)を、天理小学校から受贈して保管している。現在、「井上式地歴標本」は、東京大学、金光学園、金光図書館、福岡県立福岡中央高等学校、青森県立弘前中央高等学校でのみ存在が確認できる貴重な資料となっている。



図3 井上式地歴標本 全34点

令和の時代の幕開け、今年10月の即位礼正殿の儀に、新天皇は黄櫨染御袍の装束で臨まれる。また一つ、歴史が刻まれる。

(図はすべて天理参考館蔵品)

新連載執筆のねらいと執筆者紹介

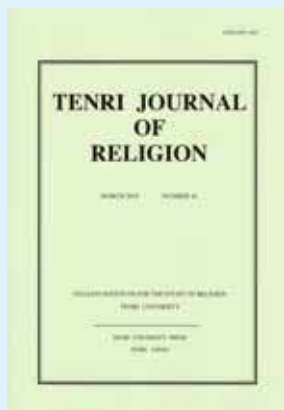
「ニューヨーク通信」

ニューヨーク天理文化協会は、2021年に設立30周年を迎えようとしている。文化協会会長であった板倉知治アメリカ伝道庁長は、オープニングレセプションの際、教内関係者に「天理文化協会は単にニューヨーク地区の事業ではなく、アメリカ全管内、全天理教的な事業である」と挨拶された。また、2010年には、天理大学と学術交流提携を交わし、天理大学ニューヨークキャンパスとしての役割も担っている。文化協会での様々な動きを広く知っていただき、共有していただくとともに、全天理教的にどのように活かしていくか、読者諸氏からのさらなる温かい支援と叱咤激励をお願い致したい。

福井陽一（ふくい よういち）

天理大学卒業後、天理教海外部勤務。1987年ハワイ伝道庁出向、1990年ニューヨークセンターに出向し、文化協会の設立に携わる。2001年天理教ニューヨーク富中布教所設立。ニューヨーク大学非常勤講師（日本語）、コロンビア大学音楽クラスアシスタント、在ニューヨーク日本領事館海外安全対策連絡協議会委員を務める。ニューヨーク天理文化協会副主任、兼日本語学校長。

新刊案内



『おやさと研究所年報』（第25号）と『TENRI JOURNAL OF RELIGION』（Number 47 頒価800円+税）が3月に発行されました。掲載論文等の内容は以下の通りです。

『おやさと研究所年報』（第25号）

- *戦後復元過程における「理の親/親の理」の教説（金子昭）
- *道にたとえられる宗教（岩嶋大悟）
- *第8回伝道フォーラム報告
「アメリカに渡った天理教：移民・戦争・青年の力」
講演1：中山正善2代真柱と天理教の北米伝道（尾上貴行）
講演2：信仰者の戦時強制収容体験が教えるもの（山倉明弘）
講演3：天理教青年会ハワイ大会（飯降政彦）
- *研究ノート：『天理教事典』改訂の過程（澤井治郎）

『TENRI JOURNAL OF RELIGION』（Number 47）

- Susumu MORI : The Meaning, Comparison, and Method of Interpretation of “Mune(Heart)” and “Kokoro(Mind)” in Tenrikyo Scriptures
- Hirokazu FUKAYA : Issue Surrounding Current Youth Poverty and Social Welfare’s Response: A Preliminary Study Introducing Tenrikyo’s Social Welfare Policy
- Akihiro YASUDA : Toward the Phenomenology of Path: Spiritual Practice and Transformation in the *Visuddhimagga* and the *Spiritual Exercises*

ジェンダー研究会報告「金光教 LGBT 会の取り組み」

金子珠理

3月5日、天理ジェンダー・女性学研究室では、伝道研究会との共催により、井上真之氏（金光教 LGBT 会長、金光教加里屋教会長）を講師にお招きして、標記研究会を開催した。これまで研究室では、宗教における LGBT 問題について、キリスト教や仏教関係の研究者などを招待講師として研究会を重ねてきたが、今回は、天理教と成立時期の近い金光教における取り組みについて報告して頂いた。

LGBT 当事者でもある井上氏は、これまでの生活上および信仰上の苦難を具体的に語られた。金光教の経典の中には、「子孫繁盛・家繁盛」という「み教え」があるが、長男ゆえの「後継ぎ」の自覚にあつて「普通」の結婚ができないことに、自分の「めぐり」が悪いからと、「めぐり」を取り払うために、熱心に祈り水垢離までして、思い悩む日々だったと振り返った。「むしろ信仰がない当事者の方が楽に生きている」ように思われ、信仰があるゆえの苦悩について述べられた。しかし「金光教のすべてが敵になっても神は味方になって下さる」「教祖様なら受け入れていたはず」とのベテラン教師の言葉によって救われ、扉が開かれていったという。

その後、金光教内の当事者とのつながりも生まれ、共励会（座談会）を行うなどして、その活動は『金光新聞』にも取り上げられるようになった。そして、2018年2月、「金光教 LGBT 会」は、各種団体として教会本部の認可を受けるに至った。まずは教内の啓発を目指し、金光教本部や金光学園での勉強会や講演会などによる、地道な活動を展開中である。2019年2月には、同教会本部月次祭の講話にも取り上げられるようになったという。

最後に、活動の支えとなっている「み教え」について述べ、子供がいない悩みに対する、「腹を痛めないで、教え子という子を幾人も授けている」という「教え子」の教話や、「互いに違っているから、役に立てる」という「5本の指」の譬えなどが紹介された。それらの核心にあるのが、立教神伝の一節「世間になんぼうも難儀な氏子あり、取次ぎ助けてやってくれ」であるという。金光教布教部長の浅野弓氏（女性）が、金光教 LGBT 会の趣旨に言及した際に述べた、以下の言葉にもそのことは窺える。

「『難儀な人を取次ぎ助ける』というご立教の精神を現代に現すのが、私たちの努めであるならば、今の世に生きづらさを感じている人の心に寄り添える教会・教団でありたい。本気でこのことに取り組み、現代に『金光大神でき』のおかげを蒙りたい。」（金光教報『AMETSUCHI 天地』2018年3月号「巻頭言」より）。

井上氏の講演を受けて、活発なディスカッションが行われた。教団の主要なポストに女性が登用されることが、多様性を認める社会形成のまずは第一歩ではないかと筆者には感じられた。

「出前教学講座」申し込み受付

おやさと研究所では、「出前教学講座」についてのご依頼を受け付けております。どのようなことでも、気軽にご相談ください。お待ちしております。

詳細は、担当者佐藤孝則（電話：0743-63-8105、またはメール：tasato@sta.tenri-u.ac.jp）までお問い合わせ下さい。

信仰に生きる 『逸話篇』に学ぶ(5)

教祖のご在世当時、道の先人たちは教祖から直接聞いたお言葉をしっかりと心に治め、生涯、自ら信仰を生きる心の指針としました。そうした教祖の逸話は、世代を超えて語り伝えられ、お道の信仰の支えになっています。

この公開教学講座では、『稿本天理教教祖伝逸話篇』における教祖の逸話を手がかりとして、お道の信仰世界の一端を明らかにしたいと思います。

本講座は、2019年4月から11月（7、8月を除く）の毎月25日、午前10時から11時30分にかけて、道友社6階ホールで開催します。

4月25日(木)	51「家の宝」	高見宇造
5月25日(土)	70「麦かち」	金子 昭
6月25日(火)	72「救かる身やもの」	澤井義次
9月25日(水)	58「今日は、河内から」	尾上貴行
10月25日(金)	71「あの雨の中を」	島田勝巳
11月25日(月)	73「大護摩」	堀内みどり

事前予約不要
来聴無料

場所：天理教道友社6階ホール

時間：午前10時～11時30分

*お車でのご来場はご遠慮下さい。